

疼痛医学

田口敏彦, 飯田宏樹, 牛田享宏 ● 監修
野口光一, 矢吹省司, 上園晶一, 山口重樹, 池内昌彦 ● 編

〔評者〕小川節郎(日大名誉教授)

『“痛み”に正面から対応するための本邦初の教科書。疼痛研究・教育に最前線で携わる執筆陣が結集し基礎研究から臨床まで「疼痛医学」のスタンダードを示す。これは本書のカバー帯に書かれている紹介の文章であるが、この紹介文がまさに本書の特徴を正確に表している。

現在におけるわが国の疼痛医学各分野のエキスパートを総動員して完成した本書は、基礎から臨床の隅々に至るまで、詳細で、かつ明快な解説によって構成されている。

1つの例を挙げてみよう。ほとんどの疼痛関係の成書では、痛みの定義を「実際の組織損傷もしくは組織損傷が起こり得る状態に付随する、あるいはそれに似た、感覚かつ情動の不快な体験」とのみ記載し、これに付随する6つの付記については省略していることが多い。実はこの付記が非常に重要な意味を持っている。例えば付記1として「痛みは常に個人的な経験であり、生物学的、心理的、社会的要因によって様々な程度で影響を受けます」と記載され、痛みの複雑性に目を向けるように注意している。本書ではこの6つの付記についてもきちんと触れられており、痛みを正確に理解しようとする科学的態度が見られ、そのような配慮がどの項目においてもよ

く施されているのである。

本書の構成は、「第Ⅰ編 総論：痛みの多元性」「第Ⅱ編 基礎科学」「第Ⅲ編 臨床病態」「第Ⅳ編 痛みの評価と治療」の4項目からなっている。前述したように、痛みに関するさまざまな面に触れている本書の特徴は各所に表れており、全ての項目を紹介できないが、例えば「第Ⅰ編 総論：痛みの多元性」では、小項目として1. 疫学、2. 痛みの医療経済、3. 痛み研究の歴史と倫理、と普通では省略されることがまれない領域についても記載されている。

現在、慢性痛への対応が臨床上大きな課題となっており、特に脳機能との関係に興味が続がれているが、第Ⅱ編においては、痛みの脳科学と疼痛行動の心理学の項目が設けられ、この課題についても最近の知識を得ることができる。

慢性痛患者に接する実際の臨床の場において、医療従事者が最も難渋することの1つは、患者との対話ではないだろうか。この件についても痛み治療におけるコミュニケーションスキルについての項目も設けられており、すぐに役立つ内容となっている。

以上、最初に述べたように、本書はまさに『“痛み”に正面から対応するための本邦初の教科書』である。「痛み」にかかわる全ての



医療従事者・研究者にとっていつも手元に置いて勉強する『教科書』と確信した。

B5・400頁
2020年10月
定価：本体6,000円＋税
[ISBN978-4-260-04083-9]
医学書院 刊